

IF：廃人がウマ娘に興味を持ったら……

鮭ハラス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつものように、すくつへと潜っていた彼女は、見覚えのないムーンゲートを発見する。

興味本位で触れて見ると、どうやらそれは地球という星に繋がっていたようだ……。

この作品は、ウマ娘。プリティーダービーとelonaのクロスオーバーになります。

※もしかしたら、キャラ崩壊があるかもしれません。

タイトル試行錯誤中

目

次

第0話：異世界からやってきた廃人

第1話：廃人を紹介してみたところ……

第2話：メジロマツクイーンの選択

第3話：食事の時間

15 9 4 1

第0話：異世界からやつてきた廃人

日本ウマ娘トレーニングセンター学園

トウインクル・シリーズへのデビューを目指して、毎年全国からウマ娘が集まるこの学園に、とある噂が流れ込んでいた。

新しく、小学生のような見た目のトレーナーが雇われたらしい。

何でも、そのトレーナーは理事長の関係者であり、

彼女に見初められたウマ娘は、

最速へと至ることができるのだとか。

根も葉もない噂ゆえ、あまり信じられていないが、

火のないところに煙は立たない、

という言葉があるように、

何の根拠もなしに、そのような噂は流れないものだ。

○○○○○

最高速度数値5 桁

とある世界に、素の速度が4桁を記録する程までに、自身を鍛え続けた少女が居た。

一般人が全力で走つても、1桁程度の速度しか出しができず、ウマ娘が全力で走つて、精々2桁。

世界レコードを何度も書き換えた伝説のウマ娘、

あのセクレタリアトですら、速度数値3桁に到達できたものの、4

桁には届かずにいた……。

○○○○○

「……ウマ娘かあ。私の世界にはない種族だけに、興味が惹かれるねえ。

それで？ 私がその、えっと、トレーナーだつけ？ になる代わりに、この世界での私の身分を保証してくれる……、だつたかな？」

「その通りッ！ 本来であれば、トレーナーになるには特別な試験や資格が必要になるが、

そこは私に任せておいて欲しい！ ……まあ、正直言うと、君が私の目の届かないところにいるのが怖い……、だけなのだが」

「あー、まあ、そうだよね。私だって、自分より強くていつでも私のこと殺せそうな人が、自分の目の届かないところにいたら怖いからねえ。……シェーラ菌が無く、エーテルの香りすらしない、こんな平和な世界があるとは思わなかつたけど」

「疑問ツ！ 君のいた世界は、そんなに過酷だつたのか？」

「そうだねえ。弱い者は道を歩くだけで殺され、強い者は周りから恐れられ、敬遠される。

そんな残酷で、強くなる以外に生き残る方法がない世界かな。

……ムーニゲートもあるし、よかつたら遊びに行つてみる？』

「え、遠慮するツ！」

……そういえば、君に言われて用意した名簿だが、気になる子は居ただろうか？』

「まあ、何人かは居たかな。色々この世界のことやウマ娘について教えてもらつたけど、本当に私が面倒を見ていいの？ 今ならまだ撤回できるけど？」

「無論ツ！ さつきはああ言つたが、ウマ娘よりも速く走れる君に興味があるのも事実！

その速さを、彼女たちにも伝授してもらいたい。……ただし、彼女たちを壊してしまうような、そんな危険なことだけはやめて欲しい」「わかつてるつて。私だつて、無闇矢鱈に誰かを傷つけるようなことはしたくないからね。

……それじゃあ、改めて。これからよろしくね？ お母さん

「こちらこそだツ！ ……別に、一人つきりの時は無理に親子の関係に見せなくとも構わないのだぞ？」

「まあ、誰が聞いてるかわからないしね。それじゃあ、私は一旦向こうの世界に帰るね。

明日までに少し、用意しておきたいものとかもあるから。じゃあ、またね。……【帰還】

○○○○○

「行つたか……」

魔法、だつたか？ 本当に彼女はこの世界の人間ではないのだな。

あの日、私の目の前に突然現れた時は驚いたものだが、
彼女が大人しい性格で良かつた。

イルヴァと呼ばれる世界のことや、その世界で暮らす様々な種族、
ネフイアと呼ばれる文明遺跡のことや、多種多様なモンスターのこと
など、

御伽噺のような世界のことを聞いた私は、
彼女に興味が湧くと同時に、……恐怖してしまった。
もしも、彼女がこの世界で暴れようものなら……。
もしも、彼女の世界のモンスターがこの世界で暴れようものなら
……。

もしも、彼女に嫌われようものなら……。

もしかしたら私は、とても危険な取引をしているのかもしれない。
だが、彼女の実力が本物なら、
神様よりも速く走れるという彼女の話が本当なら！

間違いなく、トレセン学園に新しい息吹をもたらしてくれるだろう

！

第1話：廃人を紹介してみたところ……

翌日、トレセン学園に所属するウマ娘たちは全員、体育館へと集められていた。

新しいトレーナーが急遽、今日からトレセン学園で働くことになる……、とは聞いていたが、まさか体育館へ集められるとは思つていなかつたのか、彼女たちは困惑していた。

「ねえ、マックイーン。ボクたち何で体育館に集められたんだつけ？」
「聞いていませんでしたの？」 今日から新しいトレーナーが来るらしいですわよ」

「そうだつけ？ ていうか、そんな事の為だけにボクたち集められたの？」

「そんな事つて、ティオーあなたねえ……。まあ、理事長直々の紹介らしいですから、他のトレーナーよりも優秀だとは思いますが」

「ふーん、優秀ねえ……。 そうだといいけど」

何も聞かされていない生徒が殆どらしく、ざわつきはしばらく收まりそうになかつた。

「……ねえ、ルドルフ。あなた何か聞いてる？」

「……いや、私も今日突然理事長から伝えられてな。

そういうマルゼンスキーコ、何か耳にしていいか？」
「私も初耳よ」

「そうか……」

しばらくざわつきが収まらない体育館だつたが、理事長が登壇してからは、さつきまでのざわつきが嘘だつたかのように、静まり返つていた。

「静肃ッ！ みんなには朝から集まつてもらつて申し訳ない！ 本日、新しいトレーナーが就任するから君たちに紹介したいと思う！ それじゃあ、入つてくれ！」

理事長の言葉を合図に、一人の子供が舞台上へと上がつてくる。本来であれば大事な式であるため、理事長の言う通り静肅にしなくてはならないのだが、入ってきたトレーナーの姿を見て、彼女たちは戸惑

いを隠せなかつた。

「どうもー。今日からこゝで働くことになつた、ユキです。みんな、これからよろしくね」

推定身長、140cm

明らかに子供にしか見えない体躯に、まるで物語の魔法使いのような法衣。

そんなおかしな姿をしたトレーナーを前にすれば、驚くのも無理はないが……。

「……ねえ、マツクイーン。い、今の見えた？」

「いえ、私にも何がなんだか……」

彼女たちが驚いた本当の理由は、ユキが入つてくる瞬間を見ることができなかつたからだ。

いや、正確に言うのであれば、ユキの速度が速すぎて、視界に收めることができなかつたのだ。

どこかに隠れていたのかとも思つたが、隠れる場所などどこにもなく、理事長が扉の方を見ていたことから、そこから入つてきたのは明確だつた。

「説明ツ！ みんな疑問に思つてることだらう。彼女はこの度、私が直々にスカウトしたトレーナーだ！ 人間でありながら、ウマ娘よりも速く走ることができ、まだ幼いながらも、トレーナーとしての実力も他のトレーナーと遜色ないほどである！」

故にツ！ 私が直々にスカウトしたのだ！」

「そうですねー。私はトレーナーとして、この理事長にスカウトされましたが、

他にも困つたことがあつたら手伝つてあげますので、遠慮しないでくださいね。

あー、あと、この格好については気にしないでね。

この服は別に私の趣味とかじやなくて、速度が上がるから着てるだけなので

今、このトレーナーはなんと言つた？ 着ているだけで速度が上がる服？

というか、ウマ娘よりも速く走れる人間だつて……？

こんな幼いのにトレーナーとしても優秀？

などなど、驚きと戸惑いは伝染していき、再び体育館はざわつきに支配された。

「えつ、その服着ると速度が上がるのか？」

……あつ、ごほん！

というわけで！ 彼女は今日からここで働くことになつた！ と
いうことを、みんなにも把握しておいてもらいたい！

それじゃあ、みんな。朝から集まつてもらつて悪かつた！ 以上
で、解散ツ！ とする。各自教室に戻るよう！」

○○○○○

その日、私は驚きを隠せなかつた。そもそも、新しいトレーナーが就任するからといって、わざわざ私達を集めの意味がわかりませんわ。

「ねえ、マックイーン。ボクたち何で体育館に集められたんだつけ？」
隣りに座つているティオーに、そう言されました。そんなの、私のほうが聞きたいですわ！

「聞いていませんでしたの？ 今日から新しいトレーナーが来るらしいですわよ」

「そうだつけ？ ていうか、そんな事の為だけにボクたち集められたの？」

「そんな事つて、ティオーあなたねえ……。まあ、理事長直々の紹介ら
しいですから、他のトレーナーよりも優秀だとは思いますが」

「ふーん、優秀ねえ……。そうだといいけど」

まあ、理事長が直々に紹介するということは、それに値するだけの実力を持つたトレーナーなのでしょう。

にしても、そんな優秀なトレーナーがいらっしゃるのであれば、おばあ様の方から、何か情報があると思つてましたが……。

「静肃ツ！ みんなには朝から集まつてもらつて申し訳ない！ 本

日、新しいトレーナーが就任するから君たちに紹介したいと思う!
それじゃあ、入ってくれ!

さて、どのような方なのでしょうか。

「どうもー。今日からここで働くことになつた、ユキです。

みんな、これからよろしくね」

……私はあの瞬間の出来事を、忘れる事はないと思いますわ。
どのような見た目のトレーナーなのかと、扉に注意を向けていたと
いうのに、まさか、壇上から声が聞こえてくるとは思つてませんでし
たから……。

「……ねえ、マックイーン。い、今の見えた?」

……やはり、見えていなかつたのは、私だけではなかつたようです
ね。

一瞬、私が見落としたのかと思つてましたが、隣りにいるティオー
にも見えていなかつたようですね。

「いえ、私にも何がなんだか……」

それにもしても、10歳……、

いえ、12歳ぐらいでしようか?

あ、明らかに幼い子供のようにしか見えないこの子が、トレーナー
ですつて……?

「説明ッ! みんな疑問に思つてていることだらう。彼女はこの度、私
が直々にスカウトしたトレーナーだ! 人間でありながら、ウマ娘よ
りも速く走ることができ、まだ幼いながらも、トレーナーとしての実
力も他のトレーナーと遜色ないほどである!
故にツ! 私が直々にスカウトしたのだ!」

ちよ、ちよつと待つてくださいまし!?

ウマ娘よりも速く走れる人間?

子供でありながら、他のトレーナーと遜色ないほどの指導力?
き、聞き間違いでしようか?

「そうですねー。私はトレーナーとして、この理事長にスカウトされ
ましたが、

他にも困つたことがあつたら手伝つてあげますので、遠慮しないで

くださいね。

あー、あと、この格好については気にしないでね。

この服は別に私の趣味とかじやなくて、速度が上がるから着てるだけなので

わ、私、疲れているのでしょうか。

今、ありえない言葉が聞こえたような……。

着て いるだけで足が速くなる服？

そ、そんな服があるわけありませんわ！

「えつ、その服着ると速度が上がるのか？

……あつ、ごほん！

というわけで！ 彼女は今日からここで働くことになつた！

ということを、みんなにも把握しておいてもらいたい！

それじゃあ、みんな。朝から集まつてもらつて悪かつた！

以上で、解散ツ！ とする。各自教室に戻るよう！」

……とりあえず、教室に戻ることにしましようか。

第2話：メジロマツクイーンの選択

トレーナー室

トレセン学園に所属するトレーナーには、それぞれ部室と部屋が与えられることになっている。

それはユキも例外ではなく、トレーナーとして扱われる以上、専用の部室と部屋が理事長から与えられていた。

「さて、と。ハウスボードはここにおいて、遺伝子複合機とトレーニングマシン……、あれ、バーベキュー セットはどうににおいてたつけなあ」彼女はどこから取り出したのか、誰が見ても幸せそうなベッドや冷蔵庫、ソファーやテーブルなどを設置していた。他にもカジノテーブルやぬいぐるみ、鏡台など明らかにトレーナ室に必要ないだろうものまで取り出しており、

そんな様子をどこから迷い込んだのか、一匹の黒猫がジト目で見つめていた。

「……なあ、ご主人」

「えーっと、ストラディバリウスとグランドピアノ……、あつ！ エヘちゃん用に祭壇も用意しておかないと」

「なあ、ご主人つてば！」

「んあ？ あー、クロ。どうしたの？」

「どうした？ ジゃなくてだな……。本当にトレーナーとかいうモノになるのか？」

「あれ？ クロ、私がトレーナーになること知つてたの？」

「……まあ、見覚えのない本を持ち込んでいたからな。赤い本でもないし、少し読ませてもらつたよ」

黒猫はそう言うと、尻尾を伸ばして数冊の本をユキへと差し出した。「本？ あー、パンフレットと名簿かあ。……そうだね、いい暇つぶしになりそうだし、トレーナーになつてみるつもりだよ？」

「……ペットにでもするつもりが？」

「いや？ そんなつもりはないけど……。なに、嫉妬したの？」

「違うわ！ ご主人に絡まれる……、あー、ウマ娘だったか？ が、可

哀想なだけだよ」

「んまあ、失礼な！　私に面倒見てもらえるなんて、滅多に無いことだ
と思うけど？」

荷物を整理しながら、ユキは黒猫の言葉に頬を膨らませながら返答
するが……、

そんな様子など露知らず、黒猫はユキに少しの間一緒に居た、もう
一人の同居人の行方を尋ねてみた。

「……かなり前に、ご主人が気まぐれで結婚した、あのエレアは？」
「奴隸商人に売ったよ？　弱くて邪魔だつたし、御祝儀が欲しかった
だけだから」

「……そういうところだぞ、ご主人。普通の奴は結婚相手を売つたりし
ないからな」

「そう？　私の友人も、港街の女たらしにお嫁さん引き渡してたよ？」

「……マジかよ」

黒猫は前脚で頭を抱えたま、有り得ない物を見る目でユキを見つめて
いた。

それからというもの、イルヴァアから様々なものを持ち込んだり、理事長と今後の予定を話したり、ノイエルを核爆弾で吹き飛ばしたりしているうちに、体育館での挨拶から1週間が経過しようとしていた。

○○○○○

「……、ですわよね？」

一週間後、メジロマックイーンはトレーナー室を訪れていた。

先週の体育館でのトレーナー紹介を見て、沢山のウマ娘が彼女のトレーナー室を訪れたものの、

……何故か入部希望者は誰一人としていなかつた。

それどころか、この一週間彼女のトレーナー室を訪れた者は、決
まって保健室を利用していた。

「あら？　これは、看板でしようか？　……なんですか？　この内容

ユキのトレーナー室の前には、明らかに手作りであろう看板のような物が立て掛けられていた。

【黒猫からの警告文】

- ①命の保証はできません
 - ②どのようない状態に陥つても、一切の責任を負いません
 - ③ウマ娘という種族をやめる可能性があります
 - ④正気を失う可能性があります
 - ⑤飽きたら捨てられる可能性があります
- ご主人による被害者数：29名

「……そういうえば、ここに入部しようとした方々全員が、保健室を利用していいるという噂を聞きましたが、……あ、あながち間違いではなさそうですわね」

今現在も保健室のベッドは、ユキのトレーナー室を訪れたウマ娘たちで占領されている。

なぜか餓死しかけている子や、野菜や葉っぱを食べようとするだけで気が狂う子、疲労がたまりすぎて筋肉痛になり続けている子などなど、全員回復に向かつてはいるが、全員が全員、

「あの子のトレーニングは死んでも受けたくない！」

と口を揃えて言うのだった。

だが、ユキのトレーナー室を訪れた子は、今までとは比較にならない程、速度が上がっていた。

そんな事もあつてか、理事長もユキのことを止められず、むしろ1週間程度で劇的に成長させられていることから、ユキのことを高く評価していた。

「あまり乗り気はしませんが、それでも成長できるなら……、天皇賞を

制覇できるなら、私は……」

悩みに悩んだ結果、メジロマックイーンは躊躇いながらも、トレーナー室の扉を開けるのであつた。

○○○○○

同日、トレーナ室の中でユキとクロは誰かが来てもいいように、暇つぶしも兼ねて料理をしていた。

「ねえー、ここ数日誰も来ないんだけどー」

「……そりやあ、あんだけのことをしたら誰も来ないだろ」

ユキはバーベキューで【クジラの刺し身】を作り、クロはフードプロセッサーで【アロエパフェ】を作っていた。

「なんでー？ ちょっとハーブを食べさせたり、主能力も上げてあげよう」と工場に拉致してあげただけなのに

「ご主人の周りではそれが普通かもしれないが、こつちの世界では普通じやないんだろ。……というか、向こうでも別に普通じやないからな？」

「貴重なヘルメスの血とかプレゼントしてあげたのになあ」

「どうせすぐに用意できるだろ？」

「まあ、メダルはいっぱい余つてるし、いつでも交換できるけどさ。ていうが、クロの姿を見て気が狂つた子も居たと思うんだけど？」

「それは……、まあ、俺が悪かつたよ。まさか、こつちの世界の猫は喋つたり、尻尾を自在に伸ばしたりしないとは思わなかつたし……」「あやうくユニコーンの角を使うところだつたよ。でも、困つたなあ。いい暇つぶしだつたのに」

「これ以上、ご主人の被害者が増えないことを祈るよ。……看板も置いておいたし、大丈夫だと思うが」

「すみませーん！ 入部したいのですがー！」

「……マジかよ。看板の文字が読めなかつたのか？」

「看板？ つて、そんなことより、入部希望！ 入部希望だつて！ やつたよクロ！ 新しい子だ！ ちょっと迎えに行つてくるから、大人しくしててねー！」

「はいはい。……つて、この刺し身とパフェどうするんだよ」

○○○○○

「……」

マックイーンは絶句した。本来、各トレーナに与えられるトレーナー室と部室は、格差が生まれないように、同じサイズの部屋が与えられるのだが……。

マックイーンが扉を開けた先に広がっていたのは、明らかに他の部室よりも広く、豪華な家具が並べられた光景であつた。理事長がユキにだけ特別広い部屋を与えた……。

……などというわけではなく、ユキが勝手にハウスボードで空間を広げ、イルヴァから持ち込んだ家具を並べていたのだ。だが、そんなことを知る由もないマックイーンは、こちらの世界の基準で考えれば、数十万から数百万円規模の家具が溢れるほど並べられているという光景に、絶句したのだ。

メジロ家だつて名のある貴族の家柄であり、高級な家具なども所持しているが、ここまで贅沢に並べられることはないだろう。

……それ以前に、明らかに部屋の広さが外見以上という、現実ではありえない光景に目を奪われていた。

「……私、幻覚でも見てているのでしょうか？ あ、明らかに部屋の規模……、というか、内装がおかしいのですが」

人の姿は見当たらず、室内を見回していたマックイーンだが、部屋の奥から美味しそうな香りが漂つて来ることに気がついた。

「何やら美味しいそうな甘い香りが……。もしかして、お料理でもしていらっしゃるのでしようか？ ……と、とりあえず、声だけ掛けてみましようか」

流石に料理中に声をかけるのは失礼かもしれないと考えたが、どの

みちこの場で待つていても埒が明かないからと、マックイーンは思い切つて声をかけてみた。

「すみません！ 入部したいのですがー！」

この時、声をかけてしまったことを、マックイーンは近い将来、後悔するのであつた。

第3話：食事の時間

「お待たせー。それでそれで？ 入部希望だつて？」

「え、ええ。入部希望ですけれど……、その前に一つお聞きしてもよろしいでしようか？」

「うん？ どうしたの？」

「この部屋の家具は一体……。理事長が用意したのでしょうか？」

「いや？ これ全部、私の私物だよ。……まあ、殆どが盗品だけど」

「そ、そうですか。……うん？ 盗品？」

「い、いやいや、なんでもないよー。……それよりもさ！ 入部希望

だつて？ 君、名前は？」

「メジロマツクイーンですか」

「め、メジロ、マツクイーン？ んー、長いからマツクちゃんね」

「ま、マツクちゃん……、ですか」

「うん！ それじやあ、入部してくれるにあたつて、色々やつてもらいたいことがあるんだけど……。

ちよつと待つてね？ 今からご飯食べようとしてたから。

……あ、良かつたらマツクちゃんも一緒に食べる？」

「よろしいのですか？」

「うん、いいよー！ 誰かと一緒にご飯食べるのなんて、数十年ぶりだしね」

「それでは、ご馳走になりますわ。……つて、え？ 数十年ぶり？」

「それじゃあ、ちよつとここに座つて待つてね」

「は、はい」

○○○○○

ユキさん、だつたかしら？ 噂に聞くほど危険……、といいますか、無茶なトレーニングをさせる方には見えませんね。

しかし、まさかご相伴にあずかることになるとは……。まあ、後ほど食堂の方へ伺おうと思っていたところですし、丁度良かつたです

わ。

それにも……。所々違和感というか、先程の会話内容、どこかおかしかったような……。

まあ、細かいことを気にしていてもしようがないですわね。

「クロー！ 料理運んどいてー！」

……？ 他にも誰か、いらしてるのでしょうか？ クロさん、と仰つてましたが、そのようなあだ名の方なんていましたつけ……？

「はいはい。……つたく、猫使いの荒いご主人だな」

「……？ ……!?!？」

あ……、ありのまま、今起こつたことを話しますわ……！

私は、ユキさんに言われた通り、ソファアームに座つていましたの。そ、そしたら猫が……。ね、猫が尻尾を2本に分けて、料理を運んでいましたの！

な、何を言つてるか、わからぬと思ひますが、

私にも、目の前で起きていることの意味がわかりませんわ！

「……？ ……やつべ、やらかした。俺が料理運んだらダメじやん

「あ、あの……。あなたは……？」

「あー、えつとだな……。ご主人ー！ ちょっとどご主人ー！」

「なにー？ 今、オードブル作つてるんだけどー？」

「俺がこの世界の猫じゃないこと、バレちゃつたんだけど！」

「……あ」

「……見られた以上どうしようもないから、この子の気が狂わないいうちに説明してくれよ」

「う、うん……。えつとね、マックちゃん。実は……」

○○○○○

それからというもの、イルヴァアという世界からやつてきたことや、トレーナになる代わりに身分を保証してもらつたことなどを、マック

イーンに説明するのであった。

「と、とても信じがたいですが、理解はしましたわ……。実際、猫が喋りますし……」

「まあ、急に異世界だの何だの言われても、信じられないよな」

「で、でも他に説明のしようがないし……。それか、マックちゃんも向こうの世界に行つてみる？ 帰還の呪文で帰れることもわかつたし、いつでも向こうの世界に行けるけど……」

「い、いいえ、結構ですわ！ ほ、本当に行けるとしても、そんな危険な世界に行きたくありませんわ！」

「そりやあ、そだよな。向こうに行つてもすぐ殺されるだろうし

……」

「ち、ちなみに。今までこちらに来た方にも説明を？」

「うん？ いや、説明したのはマックちゃんが初めてだよ。

……一応説明しようとはしたけど、それより先に工場へ行つてたり、クロが喋つただけで気が狂つちゃつたりして、説明できなかつたんだよね」

「そうでしたか……」

(工場……?)

と、疑問に思つたものの、本能的に嫌な予感を感じ取つてか、あえて聞かなかつた事にしたマックイーンであつた。

「うん。というかむしろ、よく発狂しなかつたね、マックちゃん」

「いえ、まあ、取り乱しましたが……」

メジロ家のウマ娘たるもの、この程度のことでは気が狂うほど、軟な育ち方はしておりますんわ」

「おおー！ 立派だねえ。……つと、ご飯前にごめんね？ 先にこれ食べていいから、もうちょっと待つてね。食べ終わつたら、これからどうするか話そうね」

「わ、わかりましたわ。……あの、ところでこれは一体」

「クジラのお刺し身だよ。……あれ、もしかして嫌いだつた？」

「く、クジラ!? クジラ……、ですか。お刺身になつてるのは、初めて見ましたわ……」

「こつちの世界じや珍しいのかな？　味は保証するから大丈夫だよー！　料理スキルもちゃんと上げてあるからね」

「そ、そうですか……」

「あ、クロも先に食べてていいよー。あとは私の方で作っちゃうから」「お、それじゃあ先に食べててるわ」

○○○○○

「いやー、相変わらず美味しいなあ」

「そう……、ですわね。初めて食べましたけど、とても美味しいですわ

！」

「だろ？……なあ、マックイーン、だつたか？」

「なんですか？」

「……ご主人のこと、あんまり悪く思わないでくれよな？」

「どういうことですか……？」

「いやな、ああ見えてご主人のやつ、結構はしやいでるのよ。向こうの世界だと、まともに話してくれる奴すら居なかつたからさ」

「それは……、ええつと、気の許せる方が居ないとか、そういう……」

「いや、違くてな。みんなご主人のこと見ると、離れていくんだわ。街を歩けばみんな逃げていき、ガードこつちの世界で言うところの警察のようなもの。警備員、警察、衛兵。そんな感じが……。

あー、襲つてくるやつがいる。そんな過酷な状況で何年も生きてきたからさ。ここみたいな平和な世界に来れて嬉しそうなんだわ」「そうでしたの。……確かに驚きはしましたが、話してみて悪い人ではないことは分かりましたし。

……何より、私は入部したくてここにきましたから。敬遠しようとは思いませんわ」

「そつか。それなら、良かつたよ」

（いやまあ、普通のやつからしたら間違いなく悪い奴だとは思うけどな？　ご主人と中のいい奴は、ほとんどが盗賊ギルドの奴だし……、街の奴らが逃げてくのは、ご主人が気分で花火^{メテオ}を落としたりするから

だし……、ガードが襲つてくるのは、ご主人がカルマー100の犯罪者だからだけど、……別に言わなくてもいいよな！）

クロは、基本的にはユキの味方である。

元々は、とある神様の下僕だったが、仕えていた神様からユキの元へと、信仰の褒美として送られて以来、数百年間ユキと共に行動していたのだ。多少なりともユキのために行動したくなるのは、仕方のないことだろう。

そんなクロの策略には気づかず、マックイーンは初めて食べるクジラの刺し身の美味しさに、舌鼓を打っていた。

○○○○○

クロとマックイーンが食事を進める中、ユキは次々と料理を作つていた。ハーブバーグや野菜の天ぷら、シュークリームやフルーツケーキなど、これでもかと言うほどの料理を作つたユキは、満足そうにクロたちのいるテーブルへと戻ってきた。

「お待たせー。いっぱい作つたから、マックちゃんも遠慮せずに食べてね」

「あ、ありがとうございます。……！　この大葉焼き、とても美味しいですわね！」

「……本当に食べちゃつたの？」

「……え？　た、食べてはいけませんでしたの……？」

「いやあ？　そんなことはないけど

「おい、ご主人。……誰の大葉焼きなんだ？」

「グウェン無邪気な女の子ちゃん」

「……マックイーン。その大葉焼き、美味しいか？」

「え、ええ……。とても美味しいですけれど……」

「そつか。それならいいんだ。遠慮せずに食べてくれよな！」

「……？　い、いただきますわ」

好奇心は猫を殺す、とはよく言つたものだ。知ろうとするから危険な目に合うし、知ろうとするから気が狂う。つまりそれは、知りさえしなければ危ない目に合うことも、気が狂うこともないのだ。……たとえ、自分が食べている肉が人肉だつたとしても。

「まだまだいっぱいあるから、どんどん食べてね！ 他にも何か食べたいものがあれば作つてあげるからね」

「そ、そんなに食べられませんわ。というか、驚くほどの料理の腕ですわね。メジロ家のシェフにも劣らない……、いえ、むしろそれ以上に美味しいのですが」

「まあ、仮にも数百年間料理してゐるからねえ」

ユキの言葉に驚いてか、マックイーンは食べる手を止めてしまつた。

「……はい？ き、聞き間違いでしようか？ い、今なんとおっしゃいましたか？」

「他にも何か食べたいものがあれば作つてあげるよ？」

「その後ですわ！」

「仮にも数百年間料理してゐるから？」

「それですわ！ 数百年つて……、さ、流石に冗談ですわよね？」

「あれ？ クロ、私が料理始めてから100年経つてないつけ？」

「いや、経つてると思うぞ。俺と出会つて少ししてから、料理をしだしたしな。……じゃなくてだな、ご主人」

「うん？」

「マックイーンが疑問に思つたのは、多分そこじやないぞ。数百年以上生きてるつてことに疑問を感じてるんだと思うぞ」

「そうなの？ つて、そつか。こつちの世界には寿命つてのがあるんだつけ？」

「あ、ありますけど。……え？ そつちの世界にはないんですけど？」

「うーん、死んでも這い上がれるからねえ。自分で埋まつた場合は例外だけど、寿命つて意味ではないかなあ」

「……これ以上驚くことはないと思つていましたが、この様子だとま

だまだありそうですわね……」

「まあ、ご主人が異常だつてのもあるからな。ご主人といる限り、驚きは無くならないと思うぞ」

「失礼だなあ。私は普通だつてー」

「いいか、マックイーン。こういう奴に限つて狂つてるのが大体だ。こつちの世界では大丈夫だと思うが、気をつけろよ?」

「わ、分かりましたわ」

「よし。……そりゃ、ご主人

「なに?」

「ご主人がハーブ以外の物を食べさせるなんて珍しいな。在庫切れか?」

「いや? 煙に行けばすぐ取れるし、いっぱいあるけど?」

「じゃあ、なんで普通の料理なんか作つてるんだ?」

「あー、それは……。ほら、前に入部したいつて来た子いたでしょ?」

「居すぎてどの娘かわからんが……、それで?」

「いやさ、速くなりたいじゃなくて、強くなりたいって言う子が居たからさ、吐くまでハーブを食べさせてあげたのよね。そしたらここに来なくなつちゃつたからさー」

「来なくなつちゃつたからさー、じゃないわ! んなことしたら、来なくなるのなんて当たり前だわ!」

「……ハーブ、ですか?」

「おつ、興味ある? これなんだけど

「これ、ですか? 見たところ、ただの葉っぱのようですが

「それ、食べるだけで筋力が上がるよ」

「……はい?」

「モージアつて名前のハーブなんだけど、食べるだけで筋力が上がるんだよね。結構貴重なんだよー?」

「にわかには信じがたいですが……、い、いただきますわ」

「あつ、待てマックイーン! そのまま食べたら……」

「……ん、ん、つ」

「美味しいでしょー? 吐いてもいいよー?」

「……」

「ま、 マックイーン？ おい、 大丈夫か？」

「……た、 食べましたわ。なんですか、これ。ありえないほど不味いんですけれど……。苦味とか酸味とかが混ぜ合わされたかのような……」

「よう、 食べきつたな。ほれ、 口直しにパフェでも食べな」「い、 いただきます」

それ以降も、イルヴァアのことを聞いてマックイーンが驚いたり、逆にこの世界のことを聞いてユキが驚いたりと、色々なことがあったが、二人と一匹は美味しく料理を食べ進めるのであつた。